

11. 野瀬遺跡 第4次調査

1. はじめに

野瀬遺跡は、美義川の支流である淡河川左岸の河岸段丘及び丘陵斜面上に立地する遺跡である。県宮闈場整備事業に伴い、平成7年度から埋蔵文化財調査を実施しており、平安時代後期から室町時代の集落の存在が確認されている。特徴的な造構として、中世の製鉄関連造構が挙げられる。

今回の調査区は、淡河川と鳴川の合流する地点の北東に位置し、平成14年度の調査地点に南接する。平成14年度の調査では、平安時代後期の掘立柱建物2棟、土坑墓2基等が検出されている。



fig.208
調査位置図
1:2,500

2. 調査の概要

現耕作土直下に11世紀後半から12世紀の遺物を多量に含む旧耕作土が存在する。調査区西側では、旧耕土層直下に遺物包含層がわずかに残存しているが、調査区の大部分では、後世の耕作により地山面まで削られており、耕土直下で造構面が検出状況された。

検出造構

検出状況された造構は、掘立柱建物7棟、水溜造構1基、木棺墓1基、火葬上坑2基、上坑、ピット等である。

S B03

東西3間以上、南北5間の縦柱掘立柱建物である。北東側は調査区外へ延びる可能性がある。柱間寸法は2.0~2.5mである。柱穴は直径40~60cm、深さ35~50cmを測る。付属施設として、水溜造構、溝状造構がある。

水溜造構

S B03の南西角で、1.8×1.6m以上の隅丸方形の平面プランをもつ造構（S E01）が検出された。周囲の4基の柱穴で構成する空間の中央に位置すること、方形のプランが建物の方向と一致することから、S B03に伴う施設であると考えられる。堆積上の観察により、常時潜水状態であったため、水溜造構と考えられる。同様の造構は、[a]時期の北区内の遺跡でも散見され、住居内の配置も共通している。

造構内より、多量の自然礫とともに、土器片が出土した。礫は、30~60cmの大型と10cm

程度の小型に大別される。すべて自然縫で、加工痕は無い。土器類は、須恵器小皿、楕、鉢と土師器鍋等が出土した。

溝状遺構 南端の柱列の南側で幅約30cm、深さ約10cmの溝状遺構が検出状況された。西側は南西方に向に弧を描いて流下する。

S B04 東西3間、南北5間の総柱掘立柱建物である。建物の東側に、さらに2間分の柱列が存在し、5間×5間の建物を想定することもできるが、柱穴の規模が大きく異なり断定はできない。柱間寸法は2.0~2.6mである。柱穴は直径30~40cm、深さ30~35cmを測る。検出



fig.209 調査区平面図

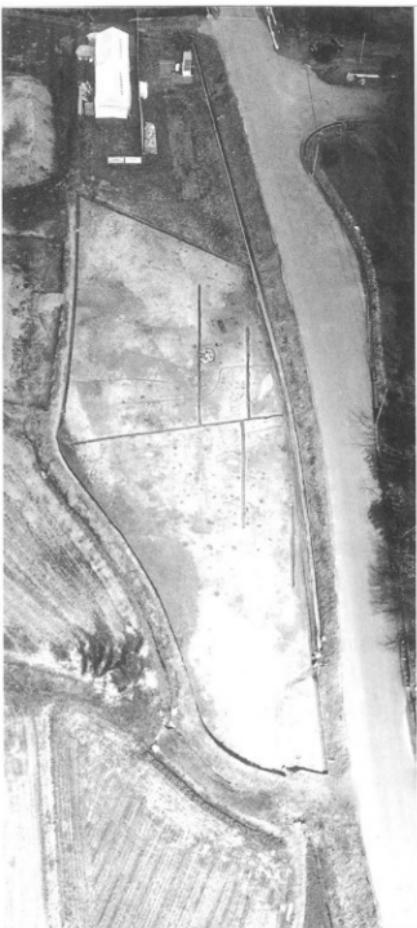


fig.210 調査区全景

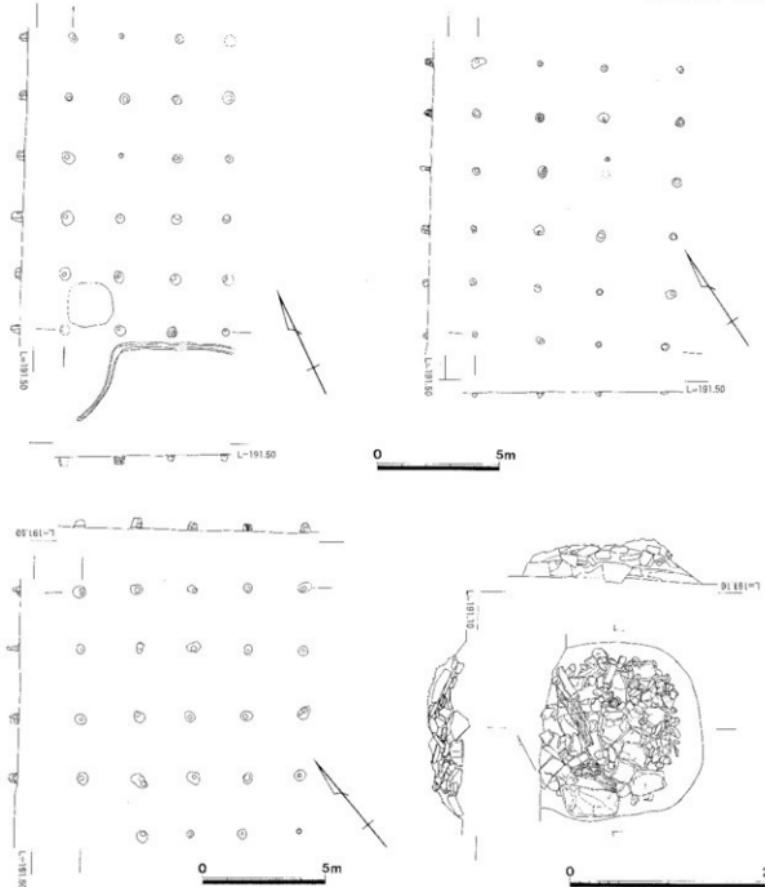


fig.211 S B03・04・05・S E01平面図・断面図

された柱穴のうち、柱痕に沿って自然石を縦方向に詰めた例が4例あり、柱を安定させるために施されたものと考えられる。

S B05 東西4間以上、南北4間の総柱掘立柱建物である。北東側は調査区外へ延びる可能性がある。柱間寸法は2.2~2.6mである。柱穴は直径30~50cm、深さ30~40cmを測る。南西角の柱穴は検出されなかったが、遺構面検出状態では一段低い箇所に当たり、柱穴は本来存在した可能性がある。南端の柱列は、他の柱穴と比べて規模が小さいことが特記される。

S B06 東西2間、南北3間の総柱掘立柱建物である。S B03~05と比べて規模が小さい。柱間寸法は1.6×2.1mである。柱穴は直径15~20cm、深さ30~40cmを測る。柱の掘形が明瞭ではない事と、柱痕の最深部の形状が尖っていることから、柱は打ち込まれていたと考えられ、通常の掘立柱建物とは異なる。

- S B07** 東西2間、南北2間の総柱掘立柱建物である。S B03~05と比べて規模が小さい。柱間寸法は2.4×2.6mである。柱穴は直径15~20cm、深さ30~35cmを測る。S B06と同様、柱痕の最深部の形状は尖っており、柱を打ち込んでいた可能性が高い。
- S B08** 東西1間、南北2間の掘立柱建物である。柱間寸法は2.2~3.0mである。柱穴は直径20~25cm、深さ30~40cmを測る。S B06・07と同様、柱痕の最深部の形状は尖っている。
- S B09** S B03に付属する可能性がある東西1間、南北4間の掘立柱建物である。柱間寸法は2.0~2.9mである。S B09の柱穴は、S B03の柱穴に比べて規模が小さい。今回の調査地は、東側から伸びる尾根を切断して平坦面を築いているため、東側の遺構面が削平され、遺構の残存状況に影響を及ぼしている可能性が高い。よって、本来はS B03と同様のプランを持つ柱穴が、現状では小規模になっている可能性がある。
- S K03** 幅60cm、長さ140cm、深さ10cmの土坑である。須恵器、土師器の破片が出土した。
- S X03** 遺構が調査区外へ伸びるため、詳細は不明であるが、幅65cm、長さ110cm以上、深さ20cmの上坑である。遺構底から炭層が検出された。東側の肩は被熱痕が存在し、火熱を使用した遺構である。埋土より、土器片が少量出土した。
- S T03** 調査区北東部で検出された木棺墓である。重複するS B03との関係は不明である。幅65cm、長さ165cm、深さ10cmの楕円形内から、内法幅45cm、長さ150cmの木棺の痕跡が検出状況された。埋土より人骨の一部が検出された。遺物は出土しなかった。

人骨 頭骨、四肢長骨、腰骨の一部と切歯のエナメル質の一部が残存していたが、残存状況は非常に悪く、痕跡をとどめるに過ぎない。

埋葬姿勢は仰臥仰展の姿勢で、頭位は北東方向で、S B

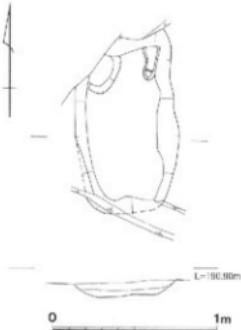


fig.212 S X03平面図・断面図

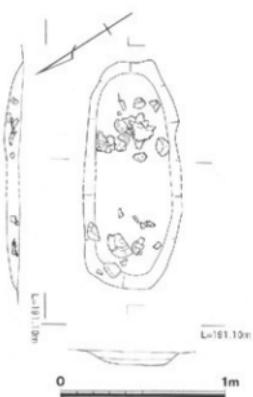


fig.213 S K03平面図・断面図

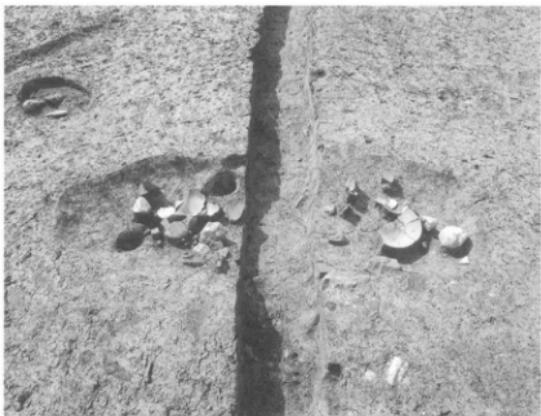


fig.214 S K03

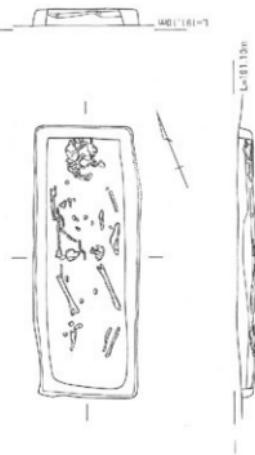


fig.215 S T03平面図・断面図



fig.216 S T03



fig.217 S T04平面図・断面図



fig.218 S T04

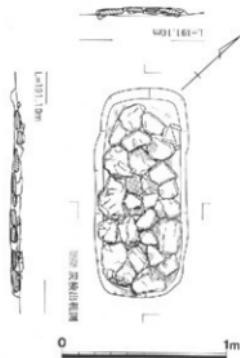


fig.219 S T05平面図・断面図

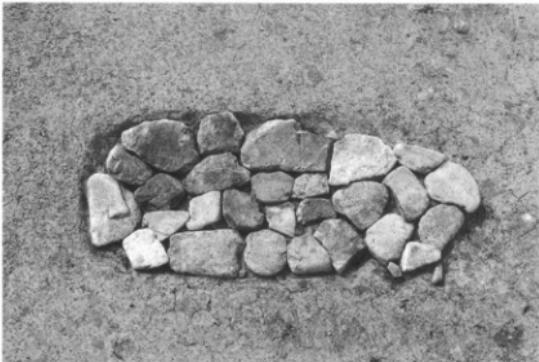


fig.220 S T05

03の棟方向とは若干異なる。両膝はわずかに東側に屈曲し、上腕は体側に沿わせた状態で埋葬されている。

S T04 幅50cm、長さ115cmの土坑である。遺構底の石敷部のみ残存しており、遺構面が数十cm削平されている事がわかる。中央部がわずかに壅む底面に、一辺15~30cm程度の板状の石を敷き並べている。敷石の上面は被熱痕があり、直上層からは、炭化米を含む炭層が検出された。同様の遺構は、行原遺跡などで検出されている。行原遺跡では骨片が検出状況されていることから、火葬土坑と想定されている。当遺構からは骨の出土は無いが、構造や被熱痕、炭化米を含む炭層の存在などの共通点があり、同様の性格をもつ遺構と考えられる。遺物は出土しなかった。

S T05 幅55cm、長さ130cmの土坑である。残存状況はS T04と同様、非常に悪い。遺構の形状、被熱痕、炭化米を含む炭層の存在など、S T04と共通点が多く、火葬土坑と考えられる。遺物は出土しなかった。

3. まとめ 今回の調査地は、後世の耕作による削平を強く受けしており、検出遺構の同時性や前後関係を確定することが困難である。掘立柱建物や、火葬土坑と掘立柱建物の重複関係からも、異なる時期の遺構が混在していることは明らかであり、所属時期については、遺構ごとの遺物整理の成果を待って検討しなければならない。

今回の調査地では中世の遺物の出土はほとんど無く、中世まで継続して集落が立地したとは考え難い。当遺跡の中世の集落は、より高位に立地しており、古代から中世への変革期の集落の推移や土地利用の変化を考える上で重要である。

また当時期の葬法に関しては、通常、同一集落内では同様の葬法を採用するのが一般的であると考えられる。今回土葬と火葬という異なる葬法が検出されたことは、被葬者の信仰や集落内で地位の違いを示すものか、埋葬の時期が異なることを示しているのか、これらの遺構から遺物が出土していないため、時期差を検討するのは困難であるが、今後、建物内に埋葬する屋敷墓の可能性を含めて検討する必要がある。



fig.221
調査地遠景

12. 西北遺跡 第3次調査

1. はじめに

西北遺跡は、神戸市北区淡河町南僧尾に所在する中世の集落遺跡であり、淡河川の支流僧尾川の左岸の丘陵緩斜面上に立地している。僧尾川は上流域では蛇行を繰り返しながら南に流下している。

西北遺跡を含む南僧尾地区内の埋蔵文化財の状況については近年まであまり知られていなかったが、圃場整備事業に伴い平成5・7年度に試掘調査を実施したところ、埋蔵文化財が存在する地区を数ヶ所確認し、遺跡の存在が明らかとなった。うち木ノ元、経塚山、西北、平井沢の各遺跡について平成10・11年度に発掘調査を実施している。特に今回の調査区の南西約200mの地点で実施した西北遺跡第1・2次調査では、16世紀後半頃の掘立柱建物などの遺構を検出しており、遺跡の様相が判明しつつある。

今回の調査も圃場整備事業に伴うもので、調査対象地は3面の田圃であり、平成11年度の第2次調査の調査区名を踏襲し、南側より、13～15区と呼称することとした。



2. 調査の概要

まず、南側に位置する13区におけるトレンチ調査の結果、南東部が高く北西部が低い旧地形を検出し、高位に位置する南東部には遺構が存在せず、低位の北半部に遺構が残存していることを確認した。このトレンチ調査の結果を踏まえ、全面調査範囲を確定して調査を実施した。

検出遺構

調査の結果、溝2条、土坑4基、落ち込み5基、ピット約50基などを検出した。

S D01

15区東端部で検出した幅1.05～1.55mの溝で、北西～南東方向に流れる。北側は、削平のため失われている。深さは、北（西）半部は6cmと浅いが、南（東）半部は長さ約3.6mの土坑状を呈する範囲が18cmと深くなっている。須恵器片・土師器片が少量出土している。

S D02

13区南半中央で検出した幅55～78cmの溝である。深さは4～9cmを測り、南側は削平のため浅くなっている。須恵器片口鉢片・土師器片などが出土している。

- S K01 14区南東部で検出した土坑で、北（東）半部は田圃造成時の削平により失われている。残存部分の規模は径1.55×1.0mの平面形が半円形を呈しており、深さは9cmを測る。須恵器・土師器が出土しているが、小片のため時期については不明である。
- S K02・03 13区北半中央で近接して検出したほぼ同規模の土坑で、断面形が橈鉢状を呈する。ともに下層にシルト層が堆積しており、水溜め状造構と考えられる。S K02は2.0×1.65mで、深さは50cmを測る。須恵器片口鉢、土師器土鍋、陶器片などが出上している。

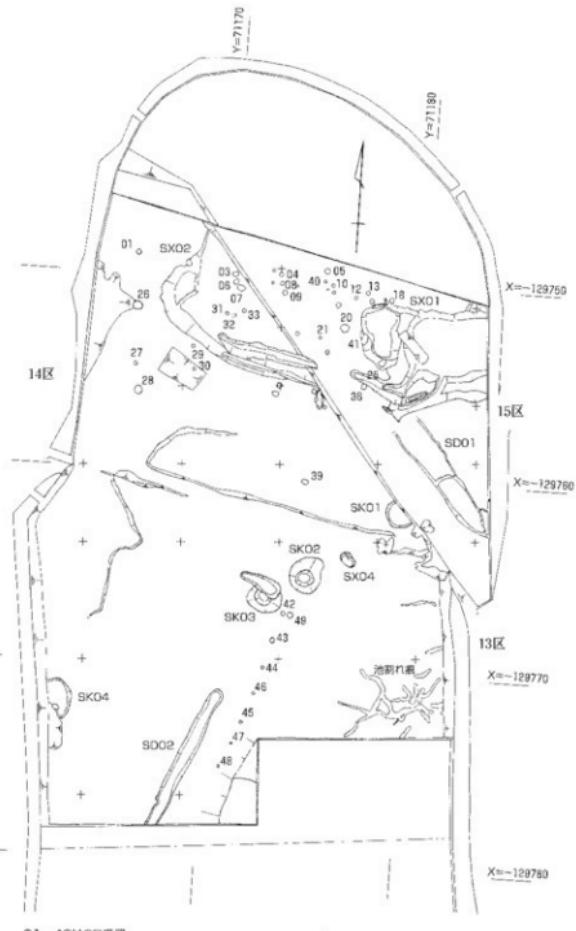


fig.223
調査区平面図

01～49はSP番号

0 10m

S K03は、S K02の西側で検出した。北半部の上部をS X05に切られている。検出した規模は、 $1.75 \times 1.4\text{m}$ で、深さは46cmを測る。遺構底面に拳大～人頭大の円礎や扁平な石（一部は焼け石）が投棄されている。須恵器碗・片口鉢・土師器皿・土鍋・青磁壺などが出土している。

S K04 13区南西部で検出した土坑で、西側が調査区外に延びるほか、南側も擾乱を受けているため、正確な規模は不明である。調査区内での規模は、 $2.0 \times 1.2\text{m}$ で、深さは15cmを測る。

S X01 15区北東部で検出した、大きな落ち込みである。南西側に溝状の遺構が取り付いている形状などから、水溜め状遺構と考えられる。

北西部は $3.3 \times 2.0\text{m}$ 、深さ約40cmの長楕円形の土坑状を呈し、その東側がやや高くテラス状になっている。さらにその東側は幅3.6m、長さ4.3m以上の大きな土坑状に深くなっている。この遺構東半部の大きな土坑状の部分は、調査区外に延びるため東側が立ち上がるかどうかは不明であるが、この部分の底面のレベルが東に向かって徐々に下がっていることや、15区の東側に未調査部分に僧尾川との間に広い平坦面がないことなどから、そのまま僧尾川に流れ込むような形状である可能性も考えられる。

遺物は、須恵器碗・鉢・土師器皿・鍋・羽釜、青白磁瓶、陶器片が出土している。

S X02 14区北半部で検出した落ち込みである。北東部は15区の田圃造成時の削平により失われており、本来の規模・形状は不明である。深さは35cmで、底面がほぼ平坦であることや南東部の落ち際に幅55～80cmの溝が存在することなどから、完結する1基の遺構というよりは田圃造成時の段である可能性が考えられる。須恵器、土師器片が出土している。

S X03 14区南部で検出した深さ約10cmの浅い落ち込みである。東部が削平のため失われており、本来の規模や性格については不明である。須恵器、土師器片が出土している。

S X04 13区北西部で検出した $0.85 \times 0.58\text{m}$ の長楕円形を呈する土坑状の落ち込みで、深さは36cmを測る。土師器小片が出土している。

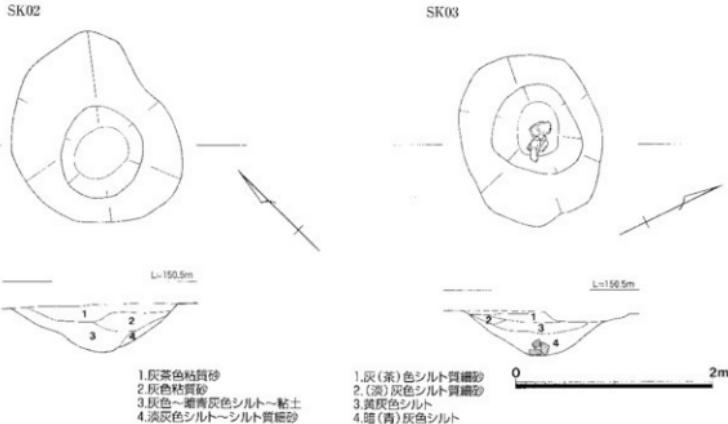


fig.224 S K02・03平面図・断面図

S X05 13区北半中央で検出した2.25×0.85m、深さ6cmの浅い落ち込みである。SK03を切っている。土師器鍋片などが出土している。

ピット ピットは約50基検出したが、調査区内で明確に掘立柱建物としてのまとまりを確定できるものはない。SP01・02・03あるいはSP03・04・05はそれぞれ直線的に並び建物の柱穴である可能性も考えられるが、ほかに対応するピットが調査区内に存在しないため、断定できない。また、13区南半中央で検出したSP42～49は柵列あるいは土留用の杭列の可能性が考えられる。SP06・17・20・21・26・29・41・43からそれぞれ須恵器、土師器片が出土しているが、小片が多くかつ少量のため、詳細な時期の確定は困難である。

地割れ痕 13区南東部で連結した細い溝状の落ち込みを検出した。鋤溝のように直線的で一定の幅をもつものではなく、深さも一定ではないことから、地割れ痕と考えられる。

3. まとめ 今回の調査地は、蛇行を繰り返して流れる僧尾川の影響を強く受けて広大な平坦面が少ない南僧尾地区内の中では比較的広い緩斜面地形にあたっており、遺構・遺物が一定量確認された。調査例自体あまり多くはない南僧尾地区内の各遺跡において貴重な成果を追加できたものと考えられる。各遺構の時期についても、切りあい関係をもつ遺構の存在を含めて今後の遺物の整理作業を待って検討する必要がある。現段階では全体として、13世紀後半～14世紀代と考えておきたい。

遺構については、15区の北側に未調査地が存在するため、14・15区で検出したピットが掘立柱建物の一部であるかどうかの問題がある。断定は困難であるが、少なくとも一部については建物の柱穴である可能性が高いものと考えられる。他の遺構では、SK02・03やSX01はいわゆる水溜め状遺構であり、当遺跡をはじめ淡河町内の各遺跡では比較的多く検出されている。SK02・03とSX01では規模や形状に差がみられるが、時期差や細かな性格の違いの有無などについて今後検討する必要がある。また、SK02・03は同規模で近接しているが、このことの意味についても今後の検討課題である。



fig.225
調査区全景

13. 淡河城跡 第2次調査

1.はじめに

淡河城は、鎌倉時代から淡河氏の居城として知られているが、本格的な調査はなく、城の構造や築造時期の詳細については不明な点が多い。昭和51年度に圃場整備事業に伴う城跡の範囲確認調査が、現在の本丸の南側で実施されたが、淡河城に関係する遺構は確認されなかった。その後、圃場整備事業が実施されるなか本丸部分周辺を残し、旧地形は失われて現状では、本丸と二の丸の一部のみを窺い知ることができる。

今回の調査は、西側辺に残る土壘が北西隅で途切れているが城が機能していた時期においても同様であったのか、また、土壘や堀などの阻塞類の遺構が存在したのかを確認することを目的として、本丸内の北西端に4ヶ所のトレンチを設定した。



fig.226
調査地位図
1:2,500

2. 調査の概要

I トレンチ

第Iトレンチは、本丸の北西隅、現状で南東から伸びてきた土壘が途切れる地点に設定した幅1.2m、長さ6.6mのトレンチである。

トレンチ西端で土壘の盛土を確認したが、耕作など後世の削平により土壘が滅失したことが観察された。土壘の痕跡の東には、幅0.76m、深さ0.35mの溝が検出された。溝の底のレベルは、南東から北西に傾斜しており、砂・シルトが堆積しており水が溜まっている状態、あるいは緩やかな水の流れがあったことが窺える。溝の堆積土中からは、上師器杯(糸切り底)や振鉢の破片が出土している。16世紀代の範疇のものと考えられる。

溝の東には、直径0.4m、深さ0.1m以上のピット2基を検出している。また、土壘盛土の下層にも遺構が観察されたため、現状の土壘を構築した以前の遺構の存在が窺える。

II トレンチ

本丸の北端に設定した幅1.2m、長さ7.5mのトレンチで、本丸北面の土壘の存在有無を確認するために設定した。調査の結果、土壘の基底部と考えられる高さ約0.35mの地山の高まりが検出された。現状では、地山を削り出し本丸曲輪の平坦面を造り出すとともに、土壘の基底部を造り出したことが窺える。

土塁基底部の幅は、約6.6mと本丸西面に残る土塁の幅とはほぼ同規模であることが明らかとなった。

土塁基底部の南辺には、幅1.2m、深さ0.26mの溝が、平行して掘削されている。また、トレンチの北端、現状の本丸端から約1.6m南で直径0.22m、深さ0.1mの円形の柱穴が検出された。土塁上に構築された柵等の城の防御施設である可能性があるが、今回の調査トレンチの範囲では断定はできない。

IIIトレンチ 本丸の北東隅に設定した幅1.6m、長さ3.6mのトレンチである。第IIトレンチで検出した土塁の基底部がこの地点まで伸びるか、あるいはこの地点まで伸びた上が東面に屈曲し、東面にも土塁を築いているのかどうかを調査する目的で設定した。調査の結果、高さ0.25mの土塁基底部と考えられる地山の高まりを検出した。土塁は、本丸の北西辺まで存在することが明らかとなった。

また、この土塁基底部の東側に直交して取り付く低い盛土帯が検出された。その幅は推定約2mある。柵等の防御施設の可能性がある。

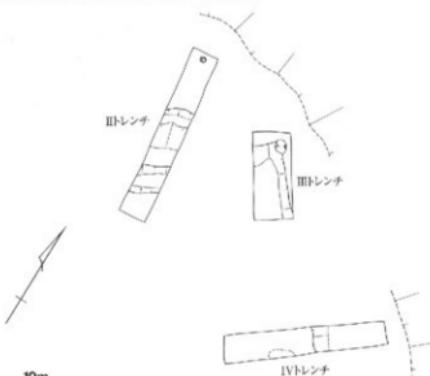
IVトレンチ 本丸の北面に土塁が存在するかを確認するために設定した幅1.2m、長さ8.5mのトレンチである。ここでは、土塁の痕跡は認められず、本丸内の平坦面造成時の削平土を盛土し、本来の尾根の幅を拡張し、曲輪を造成していることが確認された。盛土上面で、土師器杯（糸切り底）が出土した。

3. まとめ 今回の調査で、本丸の土塁は、天守台の南東辺と西辺、北西辺に存在し、土塁で本丸内をコの字上に取り囲んでいたことが明らかとなった。また、居住的遺構も検出されており、城の構築法や構造を考える上で貴重な資料を得ることができた。



fig.227 淡河城縄張図
（兵庫県の中世城館・莊園遺跡）
兵庫県教育委員会1982 一部加筆）

fig.228 調査区平面図 0 10m

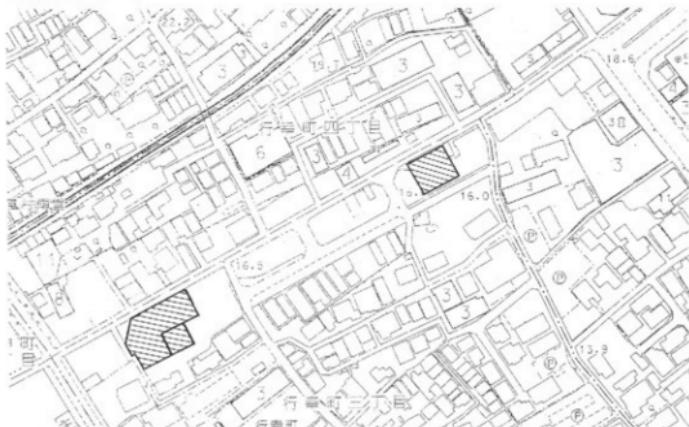


14. 行幸町遺跡 第4-1~3次調査

1. はじめに

神戸の市街地の背山である六甲山地は、東から西へ次第に標高を下げて鉢伏山で急崖になり明石海峡につながる。行幸町遺跡は、この六甲山地と大阪湾に挟まれた狭隘な平野部の西端近くに位置し、千森川によって形成された扇状地上に立地する。現地表の標高は、16m前後である。

この地域は摂津と播磨の国境にも近く、古代より交通の要所として知られている。調査地の北側には近世の西国街道が東西に通り、古代の山陽道もほぼ同じルートを通っていたと推定されている。



2. 調査の概要

4-1次

本調査は、道路築造に伴うもので、着手順にそれぞれ第4-1・2・3次調査とした。

この調査地は、平成13年度の第2-2次調査D区の西隣に位置する。また、後述の第4-2次調査地とは西側と北側が接する。

基本層序

基本層序は、以下の通りである。

盛土（真砂土、瓦礫）、黒灰色砂質土（近代耕作土）、暗灰色砂質土（近世頃の耕作土）、黄褐色砂質土（近世頃の床土）、灰褐色砂質土（中世頃の耕作土）、黄灰色細砂～粗砂（遺構検出層）である。

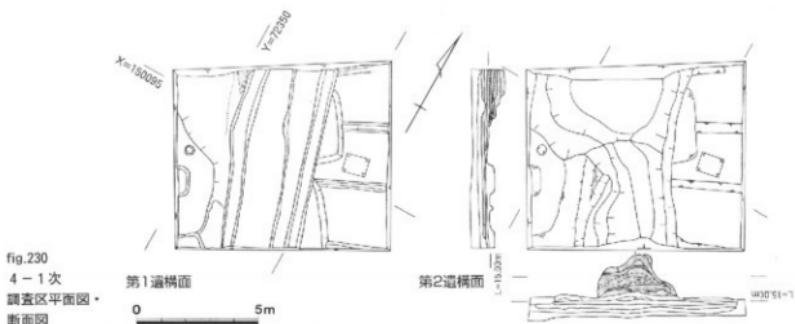
遺構面のレベルは15m前後を測り、北西から南東方向にむけて緩やかに傾斜する。

検出遺構

北西～南東方向に伸びる溝や道状の高まりや土坑、それに直交する鋤溝を検出した。

また、さらにそれらの下層には、鎌倉・室町時代頃の大きな掘り込みや、それに切られる奈良時代頃と思われる溝が確認された。

道路状遺構 2本の溝に挟まれた状態で、マンガン層の固く沈着した面が確認された。この面は両側の溝よりも高く、よく締まった土が堆積している。周辺状況からみて、耕作地を画する溝と畦道と考えられる。



S X03 最大幅6mを超え、深さは1.3mほどの大きな掘り込みである。後述の奈良時代のSD01を切り込んで、掘り込まれている。埋土より上層近くまで人為的に埋め戻されたと推定される。底面近くから、鎌倉・室町時代頃の土器が出土している。

S D01 北西から南東方向へ流れる溝で、検出長約4m、幅約3.5m、深さ1.6mを測る。上層には灰褐色系の細砂～中砂、下層には黄褐色粗砂、底近くには黒色シルトが堆積する。断面の形状は二段掘りになっており、上段はU字形、下段はV字形を呈する。遺物は、奈良時代頃の土器片がわずかに出土している。

4-2次 この調査地は4-1次調査地の北および、西側に位置する。調査地は家屋移転の関係等から、3ヵ所（1～3区）に分割して調査を実施した。

基本層序 4-2次調査の基本層序は、盛土、耕土、淡灰褐色砂質土、暗灰褐色砂質土（遺物包含層）、淡黄褐色砂質土もしくは暗黃灰褐色細砂～粗砂（構造面）となる。

検出遺構物 奈良時代の大溝の続きを検出した他、室町時代から戦国時代にかけての集落に伴う柱穴や井戸、墓等を検出している。

S K01 1区の南端で検出した。幅は東西約1.2m×南北約2.5m以上で、深さ約25cmを測る。多数の小礫～中礫を投棄しており、それと共に14世紀～15世紀の土器も混じる。SD18の埋没後に存在した痕跡に礫や土器を投棄したものであろう。

S D18上層 1区の中央を北西～南東方向に延びる大溝である。幅約2.6～4.3mで深さ約0.4m～0.55mを測り、室町時代の須恵器や土師器が出土している。おそらく水路として機能していたと考える。西肩の一部に石列が確認され、簡単な護岸を施していた様である。

S X01 1区の南端で検出した、不整円形の落ち込みである。SD18上層の南端に接して存在している。幅約7mで、深さ約1.6mを測る。

室町時代の須恵器や土師器が出土しており、SD18上層と同時併存していた可能性が高い。おそらく水路であるSD18上層から流入する水を蓄える、水溜遺構であろう。

S T01 3区の南端で検出した。幅約0.5m×1.6mで、深さ約0.1mを測る土坑墓である。座標北から東へ約30°振っている。人骨が遺存しており、頭位は東で屈葬である。刀子らしき鉄製品を人骨の右肩付近に副葬している。

土器類の副葬が無いため、遺構の正確な時期は不明である。室町時代頃の須恵器や土師器が細片で出土している。

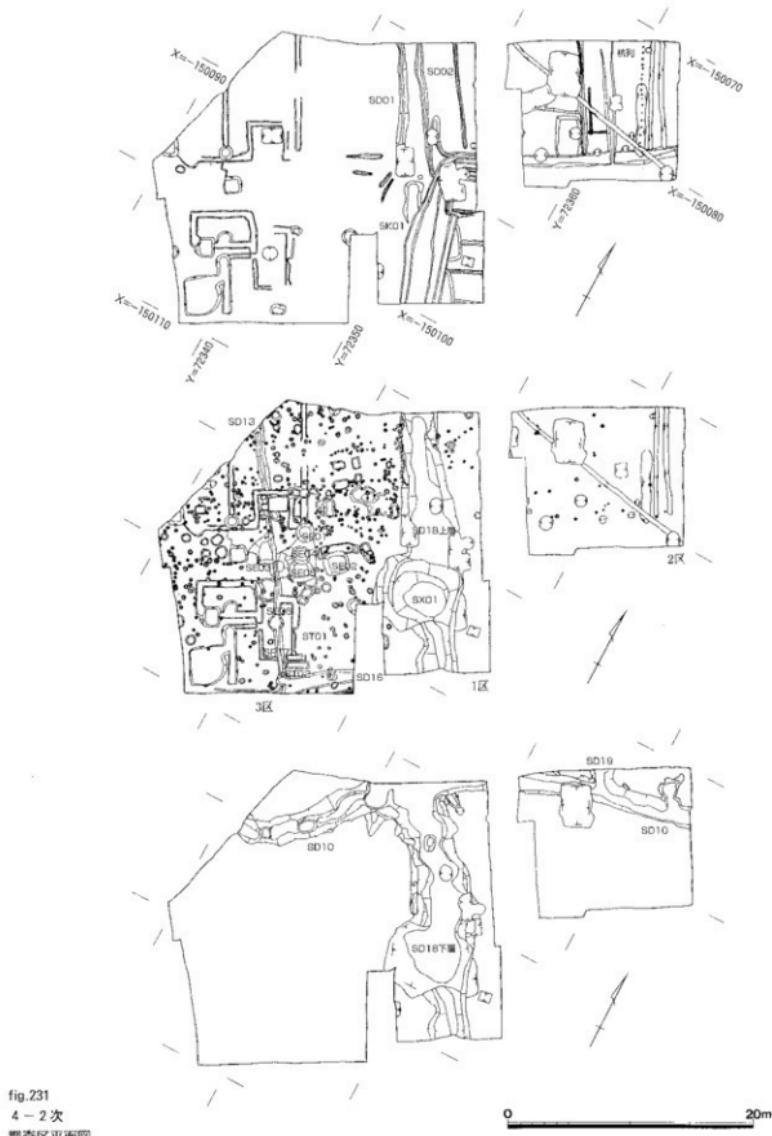


fig.231
4~2次
調査区平面図

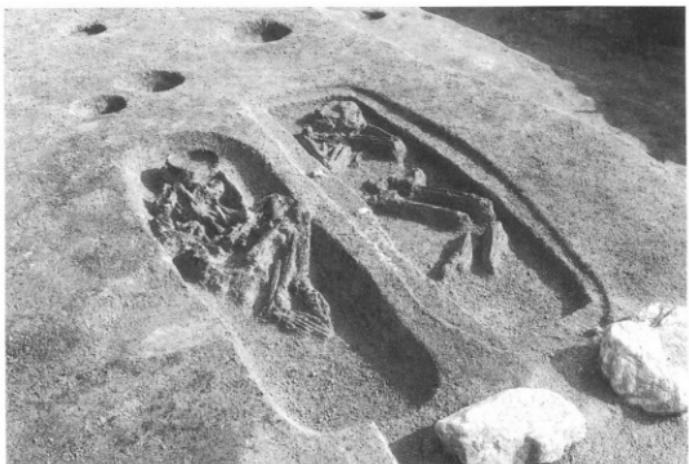


fig.232
S T01・02



fig.233
4—2次
調査区全景

S T02 3区の南端で、S T01と並んで検出した木棺墓である。S T01と同様に、座標北から東へ約30°振っている。墓坑の幅は約0.65m×1.93mで、木棺の幅は約0.43m×1.72mを測る。深さは約0.12mである。人骨が遺存しており、頭位は東で伸展葬である。

副葬品は無いが、墓坑内から室町時代頃の須恵器や土師器が細片で出土している。

S E01 3区中央で検出した、円形の井戸である。掘形は径約1.4mで、深さ約1.25mを測る。中央の底部付近に、径約0.8mを測る円形の桶のタガが2段に残る。

土層断面を観察すると、タガの残る約0.8mの幅で井戸の上面付近まで垂直に立ち上がっている。桶自体は腐食しているが、結桶組型の積み上げ式井戸となる可能性が考えられる。

出土した須恵器と土師器から、室町時代頃の井戸と思われる。

- S E 02 3区中央で検出した、方形縦板組型の組立式井戸である。掘形は幅約2.2×1.8mで、深さ約1.4mを測り、井戸枠の木組は幅約0.85×0.8mで、底面から約0.7mまで縦板材の立ち上がりが確認できる。土層断面を観察すると、木組みの幅で井戸の上面付近まで垂直に立ちあがっており、おそらく腐食したのであろう。

木組みの構造は礎石の上に隅柱を立て、横棟とは、通しはぞで組んでいる。縦板は幅約0.1~0.3mの板材を使用し、2枚から3枚重ねにされている。集水施設として、径約0.35mの曲物が使用されている。

出土した須恵器と土師器から、室町時代頃の井戸だと考えられる。

- S E 05 3区中央で検出した、円形の井戸である。掘形は径約2.0mで、深さ約2.15mを測る。

井戸の上面付近から5枚重ねの上師皿が出土しており、廃棄時に祭祀を行った事が窺われる。これらの土師皿の時期は14世紀代であり、その廃棄年代も理解できる。

- S E 06 3区のほぼ中央で検出した、方形の井戸である。掘形は幅約1.8mで、深さ約1.3mを図る。井戸枠の構造は不明である。土層断面を観察しても、掘形と井戸本体の境となる立ち上がりは確認できない。井戸の廃棄時に、その構築部材を抜き取った可能性も考えられる。

井戸の下層から13世紀代の須恵器の碗が出土しており、井戸の時期もその頃であろう。

- S D 13 3区で検出した溝である。幅約0.6mで、深さ約0.1mを測る。座標北から約30°西へ振る角度で3区中央部を南北に延び、南端で約90°西へ曲がり延びている。敷地を区画する溝となる可能性が高い。14世紀に廃棄されたS E 05を削平しており、それより新しい事実が理解できる。

- S D 16 3区の南西端で検出した溝である。幅約1.2mで、深さ約0.2mを測る。座標北から約60°東に振る角度で東西に延び、S D 13の屈曲部付近に接して約90°南へ曲がっている。S D

fig.234
S E 01



13と同じく、敷地を区画する溝となる可能性がある。

ピット群 2区中央を南北方向に延びるSD18を境として、その西側で顕著に確認されている。基本的に柱穴と考えるが、建物としての縛まりは確認できていない。

室町時代頃の須恵器と土師器が細片で出土している。時期が明確に判る遺構としてはSP17から14世紀代の瓦器碗が出上している。

SD10 調査区の北端付近を東西方向に延びている。幅約1.8~2.2mで、深さ約0.9mを測る。中脣~下脣にかけては中砂~粗砂が多く堆積し、水が流れていると考えられる。遺物は殆ど出上していないが、以前の調査結果から、飛鳥時代~奈良時代の大溝であることが判る。

SD18下層 1区の中央で南北方向に延びる溝である。幅約3.8~5.3mで深さ約1.7mを測る。溝の中央部付近では中砂~粗砂が多く堆積し、水が流れていると考えられる。

SD10とつながるが、切りあい関係は確認できない。SD10と同時併存する溝だと考えられる。時期の判る遺物は、出土していない。

4-3次 今回の調査は、平成13年度に調査を行った、第2-1次調査地の北西側にあたる。調査前は建物が除去され更地となっていた。現地表高は16m前後である。

基本層序 基本層序は以下の通りである。瓦礫・褐色砂（表土・現代盛土）、黒色粘性砂質土（近世・近代の耕作土）、灰色粘性砂質土（中世？~近世の耕作土）、黄灰色砂質土（中世？~近世頃の耕作土上）、灰褐色砂質土（中世の耕作土、部分的に残る。当該時期の土器を含む）、黄褐色粗砂（遺構検出面）となる。現況地表面から遺構検出面までは、約1.2~1.5mであり、北西~南東方向に緩やかに下がっている。

検出遺構 溝とピットが発見された。また、溝の近くには土器、瓦類がまとまって投棄されている場所があった。

SD01 検出長約11.5m、最大幅9m、深さ約1.6mの溝で、ほぼ南北方向に流れ、調査区の西端で、ほぼ直角に西に曲がっている。

この溝の掘形断面はU字形で、一部小段状を呈している部分もある。堆積土は黄褐色系



fig.235 4-3次調査区平面図

粗砂と極細砂が交互に堆積しており、数度にわたる洪水で埋没したと推定される。また、溝は、改修が行われたようで、洪水砂の堆積する前に、溝の両肩には灰褐色砂質土を土堤状に0.5m程、盛り上げて溢水に備えている。

溝の底近くには、黒色砂質土が堆積し、この中から、多数のモモの核や種類不明の植物種子が発見されている。また、奈良時代の土器や、曲物の蓋または、底と思われる板材や木端材、木の枝等が部分的にまとまって出土した。

水口

調査区の北西端は土堤状の高まりが一部途切れ、幅0.8m、深さ0.3m程、V字状に切り込まれていた。土手より外側は黒色シルト層が厚く堆積し、その上を黄褐色粗砂層が覆っていた。また溝側の水の落ち口には、拳大の石が数個転落していた。これは、土堤より外側の湿地の水を、排水するための水口と判断される。

付け替えた前の溝

S D01は調査区の西端で、ほぼ直角に西に曲がっているが、ちょうど屈曲する部分の土堤状の盛土を除去すると、黒色～暗褐色シルトと黄褐色粗砂が瓦層に堆積する幅約3m、深さ0.7mの溝が確認された。この溝はほぼ南北方向に流れしており、平成13年度の第2-1次調査で確認された溝に統く。この溝はこれまで発見された東西方向の大溝に接続するものと思われる。以上のことから、本来は、南北方向に流动していた溝が埋没した段階で、これまでよりもさらに深く掘り直し、土堤を盛り上げ、西へ曲がるように付替えたと想定される。西向きに付替えた時期は概ね奈良時代であり、最初の南北方向の溝が掘られた精確な時期は出土土器が細片のため、明らかでない。

S D02

S D01に平行して流れる溝で、S D01の土堤の外側を走る。約10m南へ流れたあたりで、掘形が浅く不明確となり消失してしまう。幅約0.5m、深さ約0.1mを測る。S D01と同様の粗砂層が堆積する。

S D03

長さ7.2m、幅0.4m、深さ0.2～0.3m程度の西から東に流れる溝で、S D01の土堤に削



fig.236
4-3次
調査区全景

られている。本来は、S D01に接続していたと推定され、溝改修時には埋没して機能を終えていたものと考えられる。

ピット群 溝 S D01より東側には、ピットが散在していた。大半は直径0.2m、深さ0.1m程度のもので、杭跡と思われるものが多い。しかし、東端では、直径0.5m、深さ0.5mを超えるものや、2 m前後の間隔で並ぶものがあり、掘立柱建物や柵列の柱穴の可能性があるものが認められる。これらから判断して、当調査区より東側に居住域が拡がっている可能性が高い。これらのピット、柱穴の時期は明確でないが、およそ奈良時代の中に納まると現在のところ考えている。

S X01 調査区東端近くで、須恵器甕の底部がピットに据えられた状態で出土した。ピットは直径0.5m、深さ0.4m程度で、彫形はほぼ甕の大きさで収めている。甕は底部の3分の2程度が残存していた。埋土上部に通して選別したが、内容物は確認できなかった。

3. まとめ 第4-1次調査では、溝や道状の高まりを検出した。この周辺で行われた調査の成果から見て、これらの遺構は、耕作地と居住地を画する溝や道路と推定される。また、下層には、鎌倉・室町時代頃の大きな掘り込みや、それに切られる奈良時代の「大溝」と接続する溝が確認された。「大溝」の掘られた目的はなお不明な点が多いが、今回のように、この溝から分岐する溝が発見されたことは、その機能を考える一助につながる。

また第4-2次調査では、東西方向に延びる奈良時代の大溝が、引き続き確認されている。今回の調査結果で溝の総延長は150m以上となる。より西方向へまだ延びる事実も判ってきた。また、S D10から分岐して南北方向へ延びる溝も確認できた。

中世では、室町時代を主体とする集落を検出している。最も古い時期では、S E06から13世紀代の須恵器甕が出土しており、集落の始まりもその頃であろう。その後、14世紀から15世紀にかけて、多くの遺構が検出されている。

これらの集落に伴う遺構は、S D18付近を境として、西側で多く検出されている。S D18より東側では耕作痕が多く確認され、ここに居住域と生産域の境界が認められる。

第4-3次調査では、奈良時代の南北方向の溝や、ピット群が確認された。溝には、水口や土堤状の遺構が付属し、当初は直線状に流れていたが、それが埋没した段階で、改修が行われ、西に直角に曲げるように流れを変更している。また溝内には、当該時期の土器や木製品の破片、食物残渣の一部と思われるモモの種等が捨てられていた。ピット群は東半分で多く検出され、そのなかには、須恵器の甕を据えた状態で検出された遺構も確認されている。これらから、奈良時代の生活域が今回の調査区より東に拡がることを示唆している。

15. 舞子砲台跡 第1～3次調査

1. はじめに

江戸時代を通して領国政策を採り、平和を維持してきた日本の地に、異国船が来航（ペリー来航など）し始め、幕末には日本近海の海岸線の防備体制の必要性が重視され始めた。内海であり外海にくらべ海防体制が手薄だった大阪湾にも、安政元年（1854）ディアナ号が進入するという事件が起り、これを契機として京・大阪を警衛するためのさまざまな施策が行われる。さらに文久3年（1863）には將軍徳川家茂が大阪湾岸の防備状況の視察を行った上で、明石海峡の警備強化を指示した。舞子にはすでに嘉永六年（1853）、明石藩により台場が築かれていたが、この指示によって急遽改築された。工事は、幕府から一万両が貸与された明石藩が勝鬨太郎（海舟）の指導のもとづいて、施工したものとされる。

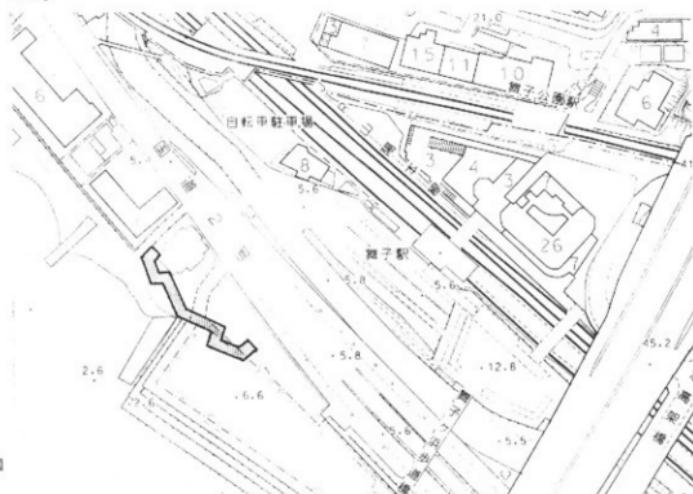


fig.237
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

1次 調査を実施した。（第1次調査）

1トレンチ 敷地の北東隅部に設定したトレンチで、長さ6m、幅2mで、深さ2.6mまで掘削したが、厚い砂層の堆積を確認したのみである。

2トレンチ 敷地中央西寄りに設定した長さ5m、幅2mのトレンチで、搅乱層から花崗岩石材が多数確認されたが、試掘溝1と同様、深さ約3mまで厚い砂層の堆積が確認されたに留まる。後述する3トレンチと重複している。

3トレンチ 調査の結果、稜線の通る整然とした算木積み（角岩・角礫石で構成）となっている石垣F・Gの隅角部が確認された。各石材は約0.4×0.4m角の小口で、約1.0mの長さをもつ規格性の高い花崗岩で、最大13段まで確認できた。石垣の規模は上端部で幅約6m、下端部

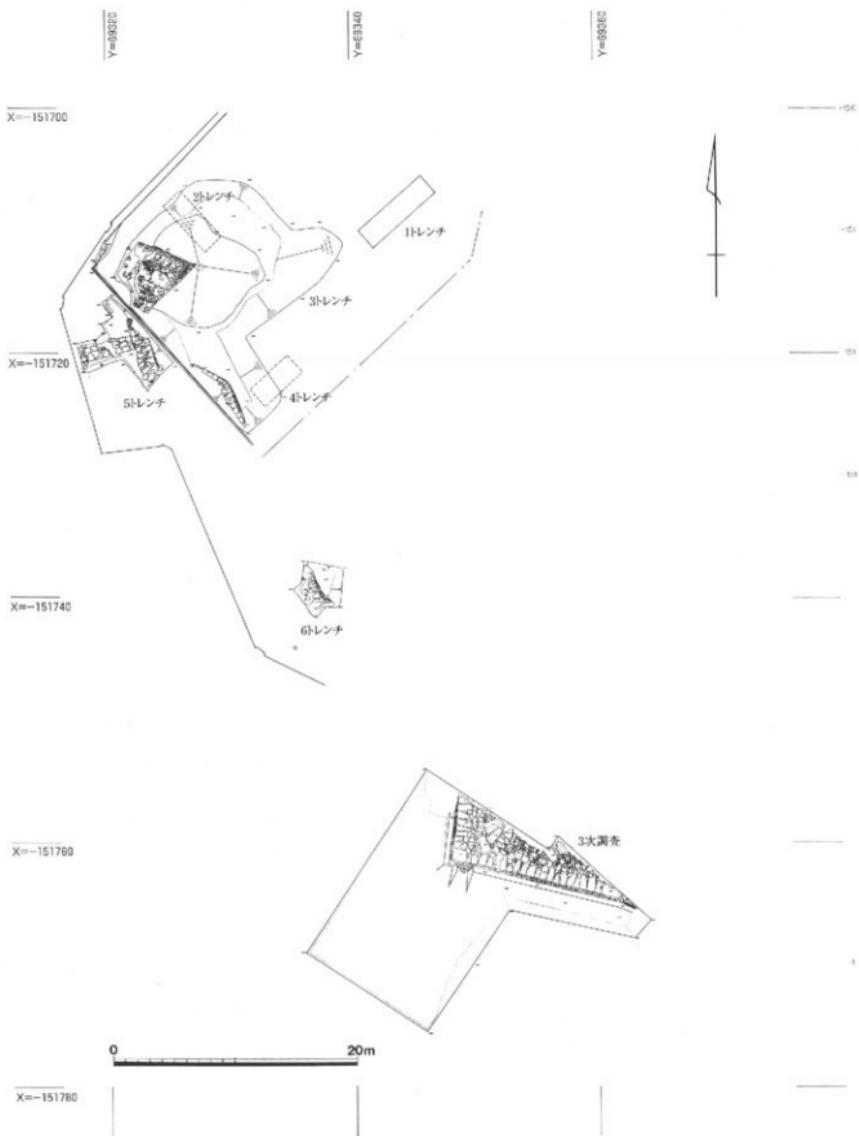


fig.238 調査区平面図

で幅約10mと復元できる。

また、この隅角部の石垣Gの東側約5mでは、石垣の隅角稜線部が鈍角を採るシノギ角の石垣J・Kが総延長約7mで、最大4段まで確認できた。前面の石垣とは概ね相似形となっており、明らかに稜堡式の平面形態を採ったものと考えられる。

- 4 トレンチ** 東辺の建物基礎通りに当たる部分に設定したトレンチで、長さ4m、幅2mで、深さ2.6mまで掘削したが、厚い砂層の堆積を確認した程度である。
- 2次** 第1次調査の結果、舞子砲台の石垣の一部が確認されたため、神戸市建設局による周辺の公園整備工事に先立って舞子砲台の遺存状況を把握するため確認調査を実施した。(第2次調査)
- 5 トレンチ** 砲台跡の全面は現在の海岸線の護岸石垣として残されており、平面形状が稜堡式の石垣天端から約6mの幅で平坦面が形成され、背面にあたる石垣H・Iも海側とほぼ平行する平面形態で築造されていることが判明した。
- また石垣と天端を結ぶように幅1.1m、長さ4.0mの通路状の石敷も確認されている。他の砲台の例を参考とすると、大砲が据えられる場所とも考えられる。
- 6 トレンチ** 3×5mの調査区内の中央東よりで、現地表下約15cmで鈍角の入角となる石垣の上部K・Mを確認した。砲台跡背面の石垣の中央部分にあたるものと考えられる。天端の石材はすでに欠けていると推測されるが、5段分の石垣を確認している。
- 3次** 第1・2次調査の成果を受けて、すでに埋め立てられている砲台東部の規模・構造・遺存状況についての資料を得るために確認調査を実施した。(第3次調査)
- この結果、砲台(台場)の東角部を確認し、海に面する東辺の長さが13.8mであることを見た。
- また、石垣の基底を確認した。基底の標高は0.0mで基底下には石材の不等沈下を防ぐための桐木(松の丸太)が置かれる。搅乱を受けて原位置を保たない最上段の石材を復元すると、砲台の基壇部分の石積みは10段ないし11段、高さ6.8mとなる。
- 3. まとめ** これまで明確な位置づけができないまま、忘れられていた舞子砲台跡が、今回の試掘調査によって、良好な保存状態で現地に埋もれていることが明らかとなった。
- 今回の調査成果では舞子砲台の規模がほぼ判明したことになる。復元幅(東西最大長)は約70m、高さは築造当初は約10mのW字形の稜堡式砲台であることが確定された。また、海側で現在見られる砲台前面の石垣についても、その石材の構成や特徴から築造当初のものと考えられることも、現地観察の結果明らかとなった。さらに、確認された石垣の諸特徴は、近世城郭から引き継がれた最末期の技術を知る上で貴重であると言える。
- 以上のように、舞子砲台跡は江戸時代末の日本の歴史を語る上で、欠くことのできない歴史遺産としてだけではなく、日本で現存する石積みの稜堡式砲台(台場)としても他に例がなく、全国的に見てもたいへん重要な遺跡である。



fig.239
調査地遠景



fig.240
2次調査区全景



fig.241
3次調査区全景

16. 白水瓢塚古墳 第10次調査

1. はじめに

白水瓢塚古墳は、神戸市西区伊川谷町潤和字シント山に所在する古墳で、明石川の支流である伊川右岸の丘陵の頂部に位置する。標高約60mの薬師山山頂に造られた古墳時代前期の前方後円墳で、「白水夫婦（妻）塚古墳」「白水薬師山古墳」とも呼ばれていた。大正末から昭和初年に行われた直良信夫氏の調査により、3重の円筒埴輪輪を巡らし、周囲に100基以上の埴輪棺が存在すると想定されており、今回調査を実施した後円部には埴輪棺が存在すると考えられていた。

昭和61年以降、古墳周辺の開発工事に伴い、10次に及ぶ発掘調査が実施された結果、埴丘の規模や、埴輪列、前方部の埋葬施設、埴丘周辺の8基の円筒埴輪棺等が確認された。

今回の調査を実施した後円部は、昭和50年代前半に盗掘を受けており、平成13年度に盗掘を受けた箇所の損壊状況の確認調査を実施した。その結果、粘土櫛の存在が確認され、南北方向に置かれていた鉄製品（刀または剣）が抜き取られた痕跡が確認された。

今回の調査は、被害状況の詳細な調査と遺物や遺構の保全を目的として、埋葬施設の調査を実施した。



fig.242
調査地位図
1:2,500

2. 調査の概要

調査の結果、ほぼ真北方向に掘削された長辺7.3m、短辺4.1m、深さ1.1mの墓坑掘形から、長辺6.4m、短辺1.9~2.4mの粘土櫛が検出された。盗掘の影響は粘土櫛の西半部の約2分の1に及んでおり、抜き取られた鉄製品は、木棺外に位置することが判明した。

粘土櫛

検出された粘土櫛の範囲は、墓坑の東側に寄っている。粘土櫛の中軸付近は、木棺の腐朽による陥没で、被覆粘土と墓坑の埋土が落ち込んでいるが、北側および南側の小口部分は、その影響が少なく、本来の位置を保っていると考えられる。

北側小口の東側と西側部分には、直径7cm程度の棒状の工具痕が多数確認され、被覆粘土をつき固めた痕跡と考えられる。

粘土櫛の東側は、 $40 \times 20 \times 5$ cm程度の粘土ブロックが、積み上げられた状態で検出された。他の箇所ではブロックの痕跡が認められないが、粘土櫛の作業工程と、粘土の単位を考える上で好資料である。

南半部分の被覆粘土の上面には拳大の自然礫を置いており、南半部分には粘土櫛上は、自然礫で覆われていたようである。北半部分は、粘土櫛の崩落による落ち込みからも自然礫は検出状況されず、北半部分に自然礫で覆われていなかったと考えられる。

棺外平坦面 木棺の痕跡の最大径部付近のレベルで、全面に平坦面があり、赤色顔料と自然礫が面的に検出された。この平坦面は、棺身の高さに対応するもので、棺内が露出した状態での祭祀面であると考えられる。盗掘された鉄製品もこの平坦面から出土しており、葬法や粘土櫛の構築過程を復元するための良好な資料である。

出土遺物 出土した遺物は、鉄製武具類である。

鉄刀 小口部西側の盗掘された鉄製品の北側から、木装模形柄頭太刀の柄部が検出状況された。刀の環頭部分と柄頭が着装状態で木質の残存状況は悪いが、漆膜が残存している。

鉄剣・槍 鉄刀の北側部分で、剣または槍の刃部が3本出土した。2本は刃部を水平に、1本はその間に刃部を立てた状態で検出された。木質部には、漆膜がわずかに残存している。

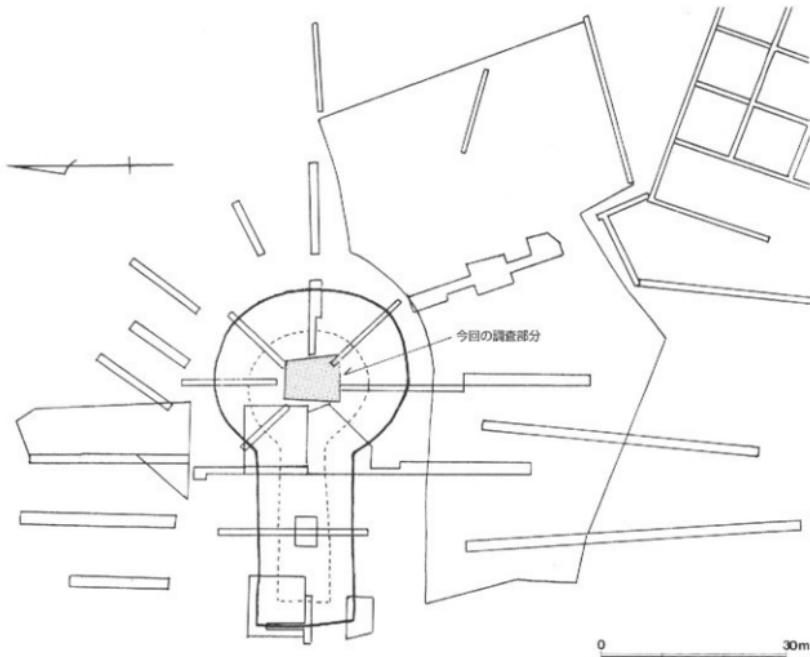


fig.243 調査区配図

木棺	木棺内は、西半部分は底面付近まで盗掘の影響が及んでいたが、遺物の位置は原位置を保っている。木棺の規模は、粘土床の痕跡と棺内に充填された粘土上の痕跡により、全長440cm以上、内側最大幅55cmの割竹形木棺と考えられる。
	木質は、鏡出土付近の一部を除いて失われているが、棺身の内側に塗られていた赤色顔料が、ほぼ全面で確認された。
	蓋は本来の位置を留めていないが、床面で間層を挟む2層の顔料が確認された箇所があり、蓋にも顔料が塗られていたと考えられる。また、両小口の閉塞粘土の上半部の形状が、蓋内面の形状を示していると考えられる。
棺内遺物	棺内からは、画紋帶神獸鏡1面、石鉗9点、車輪石4点、鉄製刀子?1点、勾玉5点以上、管玉40点以上、ガラス玉300点以上が検出状況された。
鏡	ほぼ棺の中軸上に位置し、鏡面を上にした状態で検出された。鏡の上面および周辺には木質が残っており、木棺の蓋または箱の部材であると考えられる。鏡式は画紋帶同向式系神獸鏡で、類似する例は東大阪市石切剣箭（つるぎや）神社付近古墳出土鏡が挙げられる。
石製腕飾類	鏡の北側で、石鉗9点、車輪石4点が重なった状態で出土した。石鉗、車輪石とともに、異なる規格のものが一括して出土しており、腕飾類の形状の変化やセット関係を考える上で良好な資料と言える。石材は緑色凝灰岩と考えられる。
玉類	木棺のほぼ中央部に赤色顔料の彩度が高い箇所があり、玉類の出土は、この付近集中している。出土位置は、中軸に近い箇所に勾玉と管玉が多く、東側には直径3mm程度のガラス玉が、西側には直径1mm程度のガラス玉がまとまって検出された。
鉄製品	鏡が出土位置の約10cm南で、鉄製品が1点出土した。刀子状の形状であるが、錆で覆われているため詳細は不明である。
閉塞粘土	木棺の両小口付近に、仕切り板の固定もしくは小口の閉塞に使用された円板状の粘土塊が検出された。双方ともに赤色顔料が確認され、外周径は木棺痕跡の内径とはほぼ一致する。調査を実施していない底面部を除き、閉塞粘土の全周から赤色顔料が確認できる。
トレンチ調査	両小口の構築方法と掘形の形状を確認するため、最小限のトレンチ調査を実施した。調査の結果、両小口は、円板状の粘土で閉塞した後、掘形との空間をすべて粘土で充填している。特に北側は、掘形の掘削面まで粘土を充填している。掘形の底面は、やや南側に傾斜させて掘削しており、木棺を埋置する部分は、さらに下辺幅約55cm、深さ約20cmの逆台形に掘削している。木棺は、下辺約30cm、上辺約20cmの断面台形の粘土台の上に置かれ、その後に空間を粘土で充填している。
3. まとめ	予想されたより保存状態が良い前期古墳の主体部の調査が実施できた結果、粘土構築方法や副葬品の配置状況を確認できる資料に恵まれた。特に木棺内の遺物が原位置を保ったまま検出できたことが大きな成果と言える。
	墓坑の形状、木棺の固定方法、棺内外の副葬品の配置とセット関係、棺外祭祀面の存在、木棺小口の閉塞粘土の確認、被覆粘土構築の作業単位と作業方法、墳丘上祭祀の存在など、前期古墳のさまざまな様相を考える上で貴重な資料を得たといえる。
	今後、これまでに実施されている墳丘部と前方部の主体部の調査成果との比較を行い、所属時期と古墳時代前期の畿内における当古墳の位置付け等を検討する必要がある。



fig.244
粘土鄉



fig.245
埋葬施設

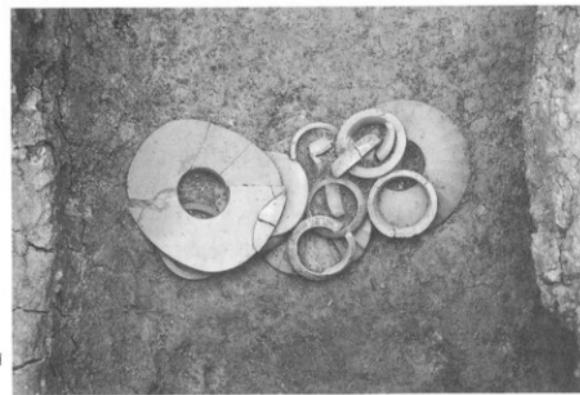


fig.246
石製腕飾類
出土狀況

17. 西戸田遺跡

1. はじめに

西戸田遺跡は、昭和54年度の圃場整備事業により初めて発掘調査が実施し、遺構・遺物が確認され、弥生時代前期から鎌倉時代までの複合遺跡と判明している。

これまでの調査成果から、弥生時代の遺構は西戸田の集落北西側の丘陵裾部から段丘面への傾斜変換点付近に、中世の遺構は明石川右岸の段丘端部に位置していると考えられる。

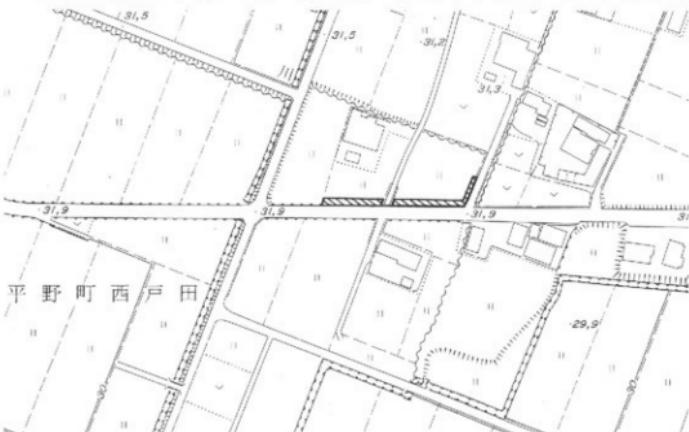


fig.247
調査地位図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、自歩道設置に伴い工事により埋蔵文化財に影響の及ぼす範囲約160mについて発掘調査を実施した。今回の調査地の標高は約30.3mになる。

基本層序

層序は、上層より盛土、耕土、旧耕土である灰色砂質土、遺物包含層である灰褐色砂質土、褐灰色砂質シルトとなり、遺構面である黄灰色細砂質シルトとなる。

検出遺構

調査区が2ヶ所になるため、東側の調査区を第1調査区、西側を第2調査区と呼称する。

遺構面は一面のみ確認した。第1調査区では、現地表面から約30cmの深さの遺構面において検出した遺構は、平安時代末～鎌倉時代初頭の溝8条、土坑3基、不定形の落ち込み、柱穴・ピット、近世の水溜遺構2基である。第2調査区では、溝2条のみである。

第1調査区

調査区の東端で、近世の水溜遺構2基を検出した。

S X01・02 S X01は、東西長3.6m、南北長2.4m以上、深さ約50cmである。遺構の壁面には部分的に立板が残っている状態で検出した。中からは江戸時代の陶磁器が出土している。

S X02は、円形の土坑でS X01の状況に類似し、中からは江戸時代の陶磁器が出土した。

S K01・02 調査区の東側で検出した土坑である。S K01は幅50cm、深さ約10cmで、調査区外に広がるために全体規模は判らない。

S K02は長辺約80cm、深さ約5cmで、中世の須恵器片が出土している。

S D01～06 調査区の東側から中央にかけて一定方向の溝を6条検出した。溝の幅は40～60cm、深さは5～8cmである。遺物は、平安時代末～鎌倉時代初頭の須恵器・土師器が出土している。

溝は6条しか検出されていないが、検出した範囲の外側にも溝が存在していたような痕跡を確認しているため同一方向の溝が他にも存在していた可能性が考えられる。これらの溝は耕作に伴うものと考えられる。

ピット 直径20~30cm、深さ10~40cmの柱穴・ピットを多数検出した。同一方向に並ぶピットもあるが、調査区が狭いため建物として確定するのに至らなかった。ただし、断ち割りをした結果、柱穴に柱の痕跡が見られるものもある。ピット内からは平安時代末~鎌倉時代初頭の須恵器が出土している。

第2調査区 この調査区では、溝2条を検出している。南北方向の溝S D01・02はともに幅60cm、深さ15cmであるが遺物は出土していないため、時期については判らない。

試掘調査 第2調査区の西側については次年度の工事予定地であるため、埋蔵文化財の存在の有無を確認するため試掘調査を実施した。第2調査区の西側の水田の西寄りの位置に2×2mの試掘坑を1箇所設定して調査を行ったところ、上層は旧耕上層、下層は暗灰色の粘土層となり、遺構・遺物とも確認できなかった。

3.まとめ 今回の調査では、第1調査区において同一方向の溝、土坑、ピットを検出した。溝については条里に伴うと考えられ、周辺の調査でも同じ方位の溝が検出される可能性がある。ピットは、柱穴として並びそうなものがあり建物の存在が考えられるが、今回は調査区が狭いため確定するには至らなかった。また、須恵器の小皿が出土している柱穴があり地鎮の可能性も考えられる。これらの遺構が集中しているのは、調査地の東側のみで西側に遺構面は下がっていき、遺構も希薄になっていく。

今回の調査地の東側は微高地にあたり、遺構が立地するが、それより西側は谷状地形になるよう遺構が希薄となることが判った。今後、周囲の調査が行われれば、この地域における遺跡の性格が明確になると思われる。

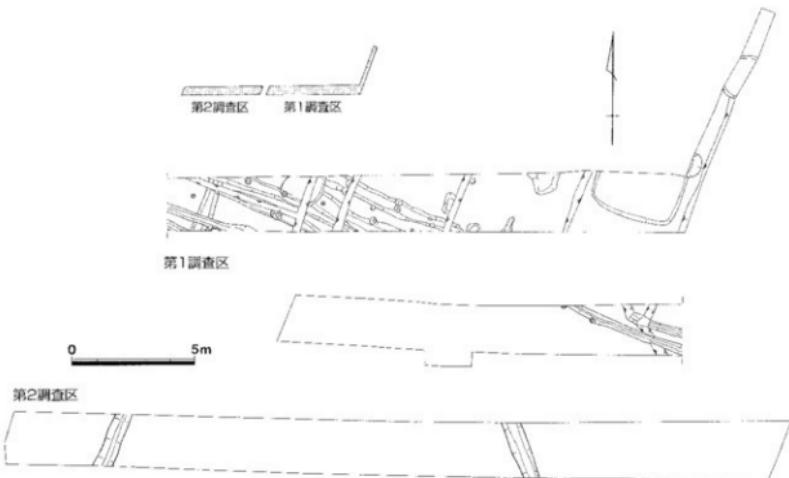


fig.248 調査区平面図

1. はじめに

今回の試掘調査対象地は、西区平野町中津の上津橋地区にあり、県営の圃場整備工事が実施される予定の地域である。「出合ふれあいの街」の北側に隣接する地域ではあるものの、これまでには埋蔵文化財の調査は実施されておらず、今回の試掘調査が初めてのものとなる。

このうち字坂ノ上・堂ノ上は、明石川本流中流域の右岸に拡がる洪積段丘上に位置する地域である。今回の試掘調査の対象となった地点は、地形的にみると、緩やかな傾斜面を形成する段丘の頂上部に当たる。標高は30~35mである。

また、字門田は、明石川右岸の氾濫原に位置する地域である。字坂ノ上・堂ノ上の大池をはさんで東に立地しているが、上記2地点と異なり標高16~17mである。



fig.249
調査地位置図
1:10,000

2. 試掘結果

試掘調査はI~III区の3箇所の調査区において約2×2mの試掘坑を計78ヶ所適宜設定して、重機あるいは人力で掘削作業を実施し、記録作成後、埋め戻しを行った。

I区

I区では、散在的に遺構あるいは遺物包含層が確認でき、ほぼ全域に埋蔵文化財が拡がるものと想定される。古墳時代後期・奈良時代後期・平安時代後期～鎌倉時代前半期の大きく分けて3時期の遺構・遺物が存在するものと考えられる。今後の調査の進展によって、遺跡の具体像が徐々に明らかとなるものと考えられる。

II区

II区は、北東から南西に向かって緩やかに傾斜している。

T.P.4・9・10・13・14・18~29・32・33については、耕土直下が地山であったり、

湿地状の堆積が確認できたことから文化財はないと考えられる。また、T.P.30・31・36・39についても、傾斜面からの段が認められ、耕土直下に地山を確認した。

上記の調査区を除いた所からは、散在的に遺構も確認され、土器も出土しており発掘調査が必要と考えられる。

Ⅲ区は調査区のほとんどから遺物が出土した。ただし、旧耕土層・床土層と考えられる層からの出土も多く、遺構面の一部は削平されている可能性が考えられる。

T.P.5・6・7・10・11・13・18で良好な土壌化層が確認でき、古墳時代後期・中世の遺物が出土している。また、現在の集落に近い調査区は、遺物は出土しているものの、あまり安定した面となっていない。これらのことから、明石川に沿う形で微高地が存在していると考えられる。

T.P.1・15・16では砂礫層が耕土下で確認できることから、微高地と旧河道の境が判明していると考えられる。

Ⅲ区は、工事対象地域の内東端・西端を除くすべての地域で発掘調査が必要であると考えられる。

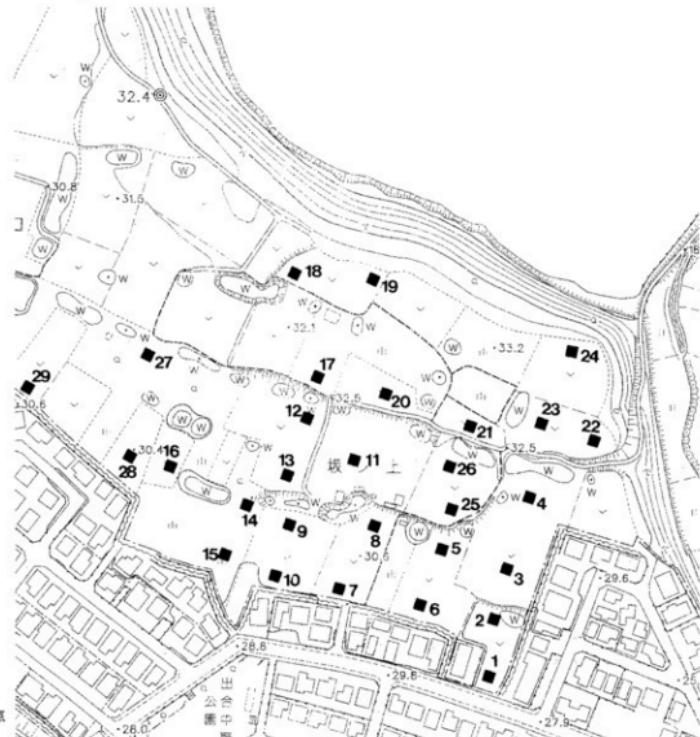


fig.250
I区調査地点
1:2,500
(全域要調査範囲)

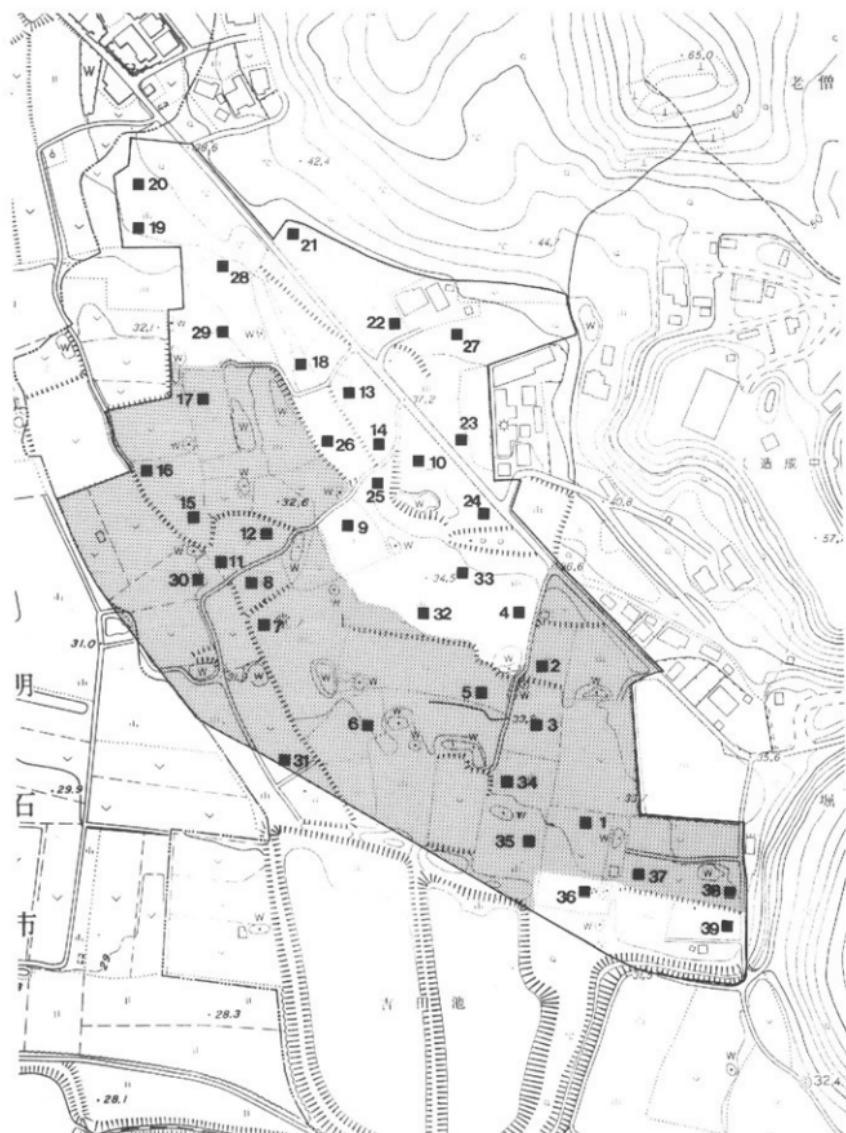


fig.251 II区調査地点 1:2,500 (網点部分要調査範囲)

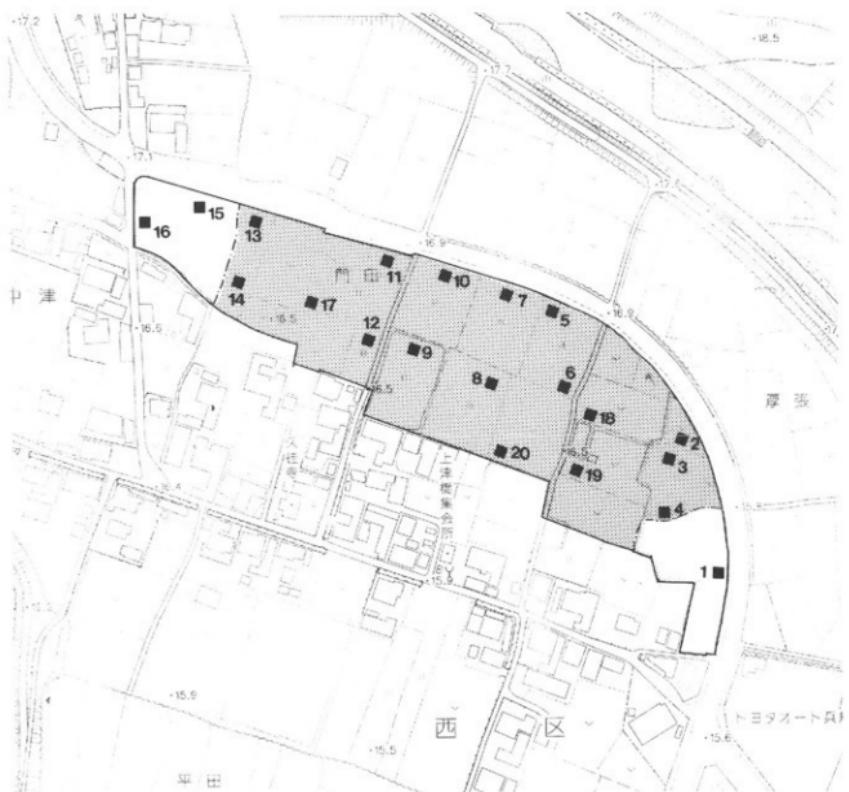


fig.252 III区調査地点 1:2,500 (網点部分要調査範囲・白部分再試掘範団)

IV. 平成15年度の保存科学調査・作業の概要

神戸市教育委員会では出土遺物を恒久的に保存していくために、保存科学的手法を用いた処置を必要とするものや、製作技術の推定・原料产地推定のために理化学的分析を必要とするもの、さらに、発掘調査現場での脆弱な遺物の取り上げや、遺構・土層断面など、移動の困難な資料の取り上げ保存などについて、それぞれの業務を実施している。

遺物の保存科学

石造物

埋蔵文化財に限らず、地上に存在する石造物も永久に保存してゆくべき文化財であり、

胴塚

保存科学的手法を用いた処置を施す必要のあるものが多く存在する。長田区にある平忠度（ただのり）の胴塚には、高さ約40cmの土台上に高さ約1.4m、幅約60cm、厚さ約25cmの花崗岩製の板碑が立てられているが、平成7年の阪神・淡路大震災によって倒壊し、破碎した。細片のいくつかは散逸したが、残存する破片は地元有志の手によって接合され、覆屋がかけられた。それまで胴塚には覆屋がなく、風雨にさらされていたため表面風化の進行が懸念されたため、これを機に石材強化剤（商品名：OH-100）の塗布、含浸による保存科学的処置を施すこととなった。

作業工程は、①石材表面を清掃後、幅30cmの寒冷紗を巻きつけ、②洗滌瓶でOH-100を滴下し、③上からポリエチレンシートを被せ、徐々に石材に強化剤が浸透するように処置した。3週間程度経過した後、シートと寒冷紗を外し曝露した。使用した薬剤は約2kgであり、約0.8kg/m²を含浸したことになる。含浸度合いについては科学的検証はなされていないため、目視による経過観察を隨時おこなう必要がある。



fig.253 阪神・淡路大震災で倒壊した碑



fig.254 接合後、石材強化剤を滴下



fig.255 ポリエチレンシートを被せ、含浸



fig.256 含浸後、乾燥中状況

**木製品
布引貯水池**

中央区にある布引貯水池は神戸開港以来、船舶の給水や神戸市街地の水源としての重要な役目を担ってきた近代化遺産であるが、築造当初（明治32年）から100余りを経過し、ダムの老朽化に伴う保存修復工事が実施されることになった。着工前に貯水池の水をさらえた時、水底から2枚のスギ材の板が見つかった。長さ185cm、幅23cm、厚さ2cmのその板には、「神戸市水道臨時工事部」の焼印が施されており、ダム築造時の基礎工の際、型枠に使用された矢板であることがわかった。神戸市の水道が敷設される以前、近代化に伴う重要な資料として、保存処置を施すことになった。

水浸出土木材は細胞壁が腐朽した上に細胞質が流失しており、乾燥に伴って変形の生じるものがほとんどであり、樹脂含浸を中心とした処置を講じる必要がある。今回も、ポリエチレングリコール（商品名：PEG4000S）含浸処理を実施することになった。

水溶液濃度20%から100%まで約5ヶ月かけて含浸し、保存処理を完了している。



fig.257 出土直後



fig.258 PEG含浸作業



fig.259 PEG含浸完了後



fig.260 焼印

遺構の保存科学

遺構の切り取り 行幸町遺跡からは室町時代の墓が2基検出された。墓内には人骨が残存していたが脆弱化が進んでおり、骨を手で持ち上げることは不可能であった。そのため遺構を周辺土壤ごと切り取り、埋蔵文化財センターへ移送することになった。

第4次調査 作業工程としては、①人骨上面を発泡ウレタンフォーム等で養生、②遺構周囲にトレーナーを掘削、③遺構下部にトンネルを掘削し発泡ウレタンフォームを充填、地面から切り離す、④重機にて吊り上げ、⑤裏面の余剰な土壌を除去しウレタンフォームで再梱包、⑥搬出、の順に延べ6日間かけておこなった。埋蔵文化財センターに搬入された木棺墓は、室内の安定した環境下で開棺・保存処理を行うようになった。



(左) fig.261
人骨出土直後
(右) fig.262
人骨養生後周囲
掘削作業



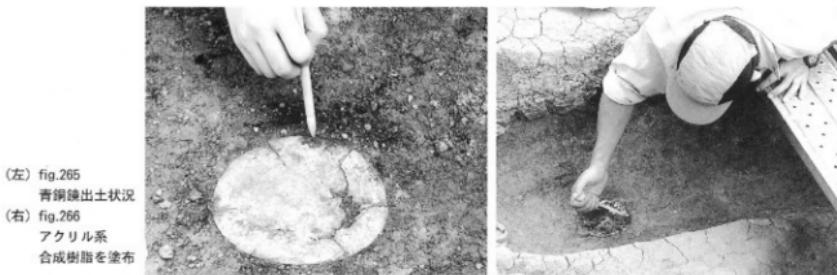
(左) fig.263
下面トンネル
掘削作業
(右) fig.264
吊り下げ



脆弱遺物の
取り上げ
白水瓢塚古墳
第10次調査

瓢塚古墳は4世紀に築造された前方後円墳であり、平成15年度の調査で後円部主体の発掘調査を実施した。内部からは青銅鏡1面・ガラス玉多数・石製腕飾類14点・鉄製武器（素環頭大刀1点・槍3点）が出土している。青銅鏡・鉄製武器類について保存科学的手法を用いた取り上げを実施した。

青銅鏡は鏡面を上にして出土したが、土圧によって小片に破碎していた。各破片も内部がブロンズ病によってチョーキングを起こしており、破片毎に取り上げても再度接合することは困難と思われた。そこで不織布をパッキング材として用い、強化した上で取り上げることにした。不織布はアクリルエマルジョン樹脂（商品名：バラロイドNAD-10）によって貼付し、さらに数回塗布した後に不織布を重ね貼りした。樹脂の硬化を待って、全破片を一括して取り上げることができた。



(左) fig.265
青銅鍤出土状況
(右) fig.266
アクリル系
合成樹脂を塗布



(左) fig.267
取り上げ作業
(右) fig.268
取り上げ後、
鏡背状況

鉄製武器類も破碎しており脆弱な状態にあった。加えて漆・木質等の有機質が残存していたため、前述の行幸町人骨同様、発泡ウレタンフォームで梱包した上で取り上げた。取り上げ後は埋蔵文化財センターにおいて保存科学的処置の実施を予定している。



(左) fig.269
鉄製武器出土周
囲掘り下げ状況
(右) fig.270
下面トンネル
鋸削作業

(左) fig.271
取り上げ作業
(右) fig.272
取り上げ後状況

土層転写

内田家住宅は今から18世紀中頃に建てられた古民家であり、その保存修復と防火水槽敷

小部北ノ谷遺跡設に伴う発掘調査が実施された際、土間部分において5基のカマド跡が切り合った状態で

第1次調査

検出され、作り変えがおこなわれていたことが明らかとなった。これについて平面的な上
(内田家住宅) 転写を実施し、建物の保存修復工事完成後、屋内にパネル展示としてディスプレイする
ことになった。

土層転写とは接着剤を遺跡土壤に直接塗布し、土壤表面の数ミリ分のみを剥がし取って
くる方法であり、遺跡発掘調査のリアルな情報を後世に残すためには非常に有効な記録保
存の手法と言える。工程は、①遺構表面をきれいに清掃し、エポキシ系合成樹脂（商品名：
トマックNR-51）を塗布する。②硬化前にガーゼをバックアップ材として貼付する。③
再度樹脂を塗布し、④樹脂の硬化後、剥がし取る。⑤埋蔵文化財センターに搬入し、余分
な土壤を洗浄し、パネルに貼り付けて完成となる。



fig.273 カマド跡検出状況



fig.274 エポキシ系合成樹脂塗布作業

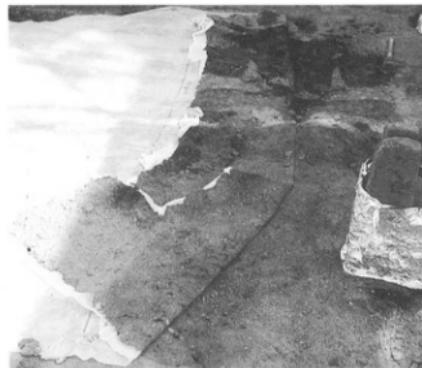


fig.275 剥ぎ取り状況



fig.276 搬送後、洗浄作業

遺跡名	次数	主な出土遺物	点数
森南町遺跡	2	鉄釘、唐輪先、鉄釘	10
御影郷古酒蔵群	1	鉄釘	15
小部北の谷遺跡		銅鏡、鉄釘	13
篠原遺跡	22	鉄釘	2
篠原遺跡	23	鉄製品、銅製品	2
西家女塚古墳	14	鉄釘	1
熊内遺跡	5	鉄釘	5
榎・荒田町遺跡	31	鉄製品	1
野瀬北遺跡	2	鉄釘、煙管、鉛滓	8
西北遺跡	3	鉛滓	2
二葉町遺跡	17-6	銅錢	1
二葉町遺跡	17-7	鉛滓	1
御殿遺跡	52-1	鉄製品	1
松野遺跡	38-1	銅錢	1
戎町遺跡	50-1	鉄製品	1
行幸町遺跡	4-3	鉄製品	3
神出遺跡		鉄釘	1
水谷遺跡	9	鉄釘	1
計69			

表1. 平成15年度出土金属製品

遺跡名	次数	主な出土遺物	点数
森南町遺跡	2	合子蓋、曲物、漆椀	19
郡家遺跡	73	加工材	1
花隈城跡	1	杭	13
兵庫松本遺跡	17-1	加工材	1
中遺跡		杭、加工材	70
野瀬北遺跡	2	漆椀、輔板	6
御藏遺跡	52	加工材	1
一葉町遺跡	17	曲物	7
行幸町遺跡	4-1		3
行幸町遺跡	4-2	柵串、柱材	39
行幸町遺跡	4-3	木製品	126
山合遺跡		杭	1
			計287

表2. 平成15年度出土木製品

遺跡名	樹種	花粉
森南町遺跡2次	19点	6点
上沢遺跡46次	6点	
西永女塚古墳5次	西永女塚古墳出土資料の自然科学分析について は、既刊の発掘調査報告書をご参照ください。	

表3. 平成15年度自然科学分析委託

平成15年度 神戸市埋蔵文化財年報

平成18年3月 印刷

平成18年3月 発行

発 行 神戸市教育委員会文化財課

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

TEL 078(322)5799

印 刷 梅アロエ印刷

神戸市中央区古湊通1丁目15301号

TEL 078(371)3831

神戸市広報印刷物登録 平成17年度 第265号（広報印刷物規格 A-6類）



本書は、再生紙を使用しています。